

SHOW HEY シネマルーム

★★★★

月の砂漠

配給/レントラックジャパン、バンドラ

2003 (平成15) 年10月19日鑑賞

Data

監督・脚本・編集：青山真治

プロデューサー：仙頭武則

出演：三上博史／とよた真帆／柏原

収史／碓由貴子／萩原健一

／夏八木勲／秋吉久美子

👁️👁️ みどころ

1964年生まれの手、青山真治監督が『EUREKA (ユリイカ)』(00年)に続いて、2001年の第54回カンヌ国際映画祭コンペティション部門に出品した作品。ITベンチャービジネスの旗手が、「成功」のかけで失った家族の絆の大切さを面白いキャラの登場人物たちを通じて、実に興味深いタッチで描いている。「立教ヌーベルバーグ」を特集した、産経新聞の「世界を翔ける日本映画の精鋭①～⑤」(平成15年10月連載)を併せて読めば、一層興味深い。

— * — * — * — * — * — * — * — * — * — * — * — * — * — * — *

<楽しみな若手監督たち>

産経新聞は平成15年10月、「競う ライバル物語」という連載の中で「世界を翔ける日本映画の精鋭①～⑤」を特集した。これは「立教ヌーベルバーグ」監督たちを比較・検討したもので実に面白い。その126回(平成15年10月9日記事)の「世界を翔ける日本映画の精鋭④」に登場したのが、青山真治監督。青山は1964年生まれで1984(昭和59)年に立教大学に入学。当時立教大学には映画関係のサークルが4つあり、青山はそのうちの「映画研究会」に入部した。青山はそこで触発されて、8mm映画を撮り、映画界に入るようになった。ちなみに①～⑤では黒沢清、高橋伴明等多くの監督が紹介されている。これらの「若手」監督はメジャー映画にはあまり登場しないものの、既に秀れた作品をたくさん製作している。近時は黒沢清監督の『ドッペルゲンガー』(03年)等が注目だ。

＜はじめて観た青山真治監督作品＞

青山監督は『EUREKA (ユリイカ)』(00年)(役所広司主演)で、2000年の第53回カンヌ国際映画祭コンペティション部門で国際批評家連盟賞とエキュメニク賞の2賞をダブル受賞した。また小説『ユリイカ』を自ら書き、第18回三島由紀夫文学賞を受賞した人物。本作『月の砂漠』は、2001年の第54回カンヌ国際映画祭コンペティション部門に正式招待されたもの。カンヌ映画祭への連続2年招待は珍しく、日本では衣笠貞之助に続く2人目の快挙とのことだ。

＜主人公はベンチャービジネスの旗手＞

主人公の永井恭二(三上博史)は、インターネット企業「ソフトリアル」を興したベンチャー企業の旗手。1990年代、日本でも学生起業家や若手ベンチャーがIT業界で次々と生まれ、「第2のソニー」や「第2のビル・ゲイツ」を目指していた。そして、その夢が現実となる可能性も現実存在した。ベンチャー企業家の夢は株式の上場。これによって起業家は莫大な「創業者利益」を手に入れることができるうえ、株式上場によって会社の信用力がつき、その業績が毎年倍々ゲームで拡大していく。そんな夢のような世界を目指して彼らは、仕事以外のあらゆるものを犠牲にして、日夜その仕事に邁進したのだった。

＜ベンチャー企業の今は？＞

しかしその成功率は、千に1つ、万に1つ、いやそれ以上。ましてやアメリカのITバブルがはじけた後は、これらの会社は次々と潰れ、夢を語り合った仲間たちも次第に分裂していったというのが実情。

そして今は、永井もまさにそんな状況だ。永井は学生起業家として革新的なビジネスモデルを創造し、一躍ITビジネス界の寵児となった。そして美しい妻と愛しい娘、豪華な邸宅に高級外車を手に入れ、経済人・家庭人として、「成功者＝勝ち組」の人生を順調に歩んでいた。そして今日も、ユーザーの注文にテキパキと電話で対応し、テレビ出演ではベンチャー企業の旗手としての夢を熱っぽく語っていた。もっとも、今日のテレビでの発言は少しニュアンスがヘン。すなわち「欲しいと思ったものを手に入れると、その欲しかったものは消えてなくなる。あとに残るのは妄想だけ」。これは一体何を言おうとしているのだろうか？

＜永井が得たものと失ったもの＞

映画は、大切な客を送り出した永井に対して、従業員の1人が辞表を提出するシーンから始まる。「社長の強引なやり方についていけない・・・」と弁明しようとする社員とそれに対して、「この会社は俺の会社ではない。俺は株主の利益のために働いているんだ。とにかく時間が貴重だ。いちいち君の弁明を聞いている暇はない。やるか、やらないかがすべ

てなんだ。やめるならやめてしまえ！代わりはいくらでもいるんだ！」と永井は一喝。

この永井のスタンスは一貫したものだ。そして今まではそれが正当だったし、「結果」もついてきていたわけだ。しかしこのビジネスにおける夢をつかみ、大成功したはずの永井が失ったもの。それは「家族の絆」だった。

<妻の思いは・・・？>

永井の美しい妻アキラ（とよた真帆）は、このような永井の生き方についていけず、愛娘のカアイ（碓由貴子）を連れて家を出て行った。そして2人は今ホテル生活。しかしアキラも酒におぼれ、時々両親の幻想が現れてくるという危機的状況。そしてホテルの部屋を訪ねてきたキーチ（柏原収史）から、「俺を買いませんか？」と言われて、あっさりとOK。寂しさを癒す料金は5万円……。もともと、アキラの意思は固まっていた。それは、カアイを連れて誰もいない田舎の実家に戻り、にわとりを飼いながら、2人でひっそりと暮らすこと……。

<キャラ豊かな面白い脇役—その1キーチ>

新進気鋭の若手、青山監督が登場させる脇役の登場人物はユニークでキャラ豊か。

その第1はキーチ（柏原収史）。彼はヤクザの父親を持っている。家族の温かさとは全く縁のない生活を強いられたキーチは、そのオヤジを殺したいと思いつつも実行できない。帰るべき家もなく、乞食のような生活をしているが、彼は若くてハンサムでカッコいい。だから、金持ちの女に自分を売ってセックスをすればお小遣いをもらえるので、それで十分。パンフレットには、「男娼」と表現されているが、そんな大層なものではない。彼ぐらい若くてハンサムなら（そして見かけでは分からないが、エッチが上手ならば）、今時金持ちの「女性客」はいくらでもいるだろう。そのキーチを「買う」客として、チョイ役で出演するのが、私の大好きな秋吉久美子。1シーンだけだが、ホントにいい女……。

<キャラ豊かな面白い脇役—その2ツヨシ>

脇役の2番手は、バイクを乗り回しているキーチの友人のツヨシ（細山田隆人）。

ツヨシの「人物像」によく分からないが、キーチと同じようなハグレ者であることだけはたしか。実はこのツヨシも父親を憎んでいた。そしてツヨシはキーチの父親から盗んできた拳銃で、「立派に」車イスに乗っている実の親父を射殺した。自分ができなかった「父親殺し」を敢行したツヨシに、畏敬の念を払いながら、これを見物するキーチ。そしてキーチはひょんなことで知り合った永井が、腑抜けのような状態で、妻子が楽しげに遊んでいる昔のビデオを見ていることにイラ立ち、永井をこの殺人現場に同席させた。何とも異常な世界だが、青山監督はこのような場面を堂々とスクリーン上に登場させて、登場人物たちの心の中を描いていく。

＜存在感のある「オヤジ」たち＞

単にツヨシから殺されるだけの役で登場するのが、ツヨシの父（夏八木勲）。本当に車イスに座ったままでいくつかの問答の末に殺されるシーンへの登場だけだが、それだけで存在感がある。またキーチの父のヤクザ（社長）が萩原健一。彼と実の息子キーチとの会話は常識離れしているうえ、「哲学的？」で実に面白い。自分の拳銃を使った殺人事件が現実起こったため、この社長は「高飛び」を余儀なくされるが、その彼が、息子に言い残す言葉も印象的。「ちょっとカッコつけすぎ・・・」という感じがしないでもないが、やはりその存在感は圧倒的だ。

＜母娘はやっと田舎家に落ち着いたが・・・＞

物語の後半の舞台は、実家の田舎家を中心。これが絵に書いたような本当の田舎の一軒家。車も持たないで、こんなところに母娘2人だけで本当に住めるのか？安全は・・・？愛娘の教育は・・・？と考えればきりが無いが、それはこの映画のテーマとは関係ないので、横において・・・。

都会生まれの愛娘カアイは、本当はこんな田舎には住みたくない。まして、にわとりと一緒に生活するなんて、臭くてコワイ……。しかし夫から逃げ出した母親の「アキラちゃん」が、娘と2人で生きていくために考えついた最低の方法だから、何とか協力しなくては……。子供心に必死に前向きに考えていることがよく分かる。

＜男同士のヘンな口論＞

やっと決心を固め、ホテルを出て、この田舎の家に移ってきた母娘のもとに向かってきた車に乗っているのは、永井とキーチ。キーチは拳銃を持ったままだ。こんな2人が田舎の一軒家が見える橋の上でいい争い。永井はキーチに「お前が家に行け。俺はどうしてもやらなければならない仕事がある。俺は帰る！」。キーチは永井に、「家族の絆を取り戻すために来たんだろ。お前が行け、車を降りろ！」。この会話は本来から言えば、全く逆でヘンな話。そして、こんな訳のわからない口論の挙句、イラついたキーチは拳銃でパーンと一発。これで永井はおしまい・・・？

＜田舎家でのキーチとアキラは・・・？＞

キーチはアキラの家に入っていった。そして、何とアキラに対して、「この家で、3人でやっていこう・・・」ときた。もちろんアキラはこれを拒否。その理由は「娘と2人で生活すると決めたから・・・」。これはちょっと論点がズレているものの、拒否するのは当然。キーチの「希望」は厚かましすぎるというもの。しかしキーチも頭がいい。キーチの第2の希望は、娘との「2人だけの生活はオーケー。しかし俺は近くに住んで時々会おうよ」というもの。アキラはこれも拒否。それは「人目がある、ここは東京ではない」と

いうもの。これも明らかに論点がズレている。そんな中途半端なやりとりの末、やっぱり予想とおり。キーチはアキラに甘えかかり、セックスを求めてきた。

<田舎家での意外な展開>

このまま、成り行きにまかせて進行したのでは大変。何のドラマか、訳がわからなくなってしまう。キーチとアキラとの「濡れ場」が始まるのか、それともアキラがはっきりと拒絶できるのか、という微妙なシーンの中に、登場したのは、拳銃で左肩を撃たれたものの生命に異常はなかった永井。ここでの永井はメチャカッコいい。「どうしてここに来たんだ？」と声をかけるキーチに対して、「お前は黙っどけ！」と一喝。そしてアキラの側ににじり寄り、しっかりと抱きしめた。アキラも先ほどのキーチに対するツレない態度から一変して積極的にこれに応え、2人は固く抱き合ったのだ。こんな展開に居場所なくしたのはキーチ。仕方なく退散だ。

<家族の絆は回復するのか？>

一夜明けた翌日、早朝。

庭に出ておそるおそる、にわとりを見ていたカアイは部屋から聞こえる音に気がつき、覗いてみると、そこには何と母親の側に寝ている父親の姿が・・・。

これを見たカアイはブッチンだ。「私はお母さんが2人で暮らしたいと言うから、友達も捨ててここで一緒に住む決心をした。だにお母さんにはお父さんがいる・・・」。大きな誤解だが、子供心を傷つけたことはたしか。そこからさらにドラマが進行するが・・・。果たして、約束の時間の取締役役に永井は出席できるのだろうか？傷心のキーチはこれからどうするのだろうか？そして何よりも、永井、アキラ、カアイの家族の絆は回復できるのだろうか？

この映画は2時間10分と長い。そして人間の気持ちを鋭く分析した力作であることはたしか。さすが青山真治監督の作品。

2003（平成15）年10月20日記